

みんなで支える支え合う特コ・特担・通級担当の社交場

I 目的

鯖丹地区特別支援研究部は鯖江市と越前町の特別支援学級担任、通級指導担当教員の研究会で約50名で構成されている。令和6年度の全国大会福井大会にむけて、令和3年度より、主に生活単元学習部会、特別支援コーディネーターの2つのグループに分かれて研究を進めてきた。各グループのメンバーの中では、研究の成果を感じられている実感がある一方、課題になっていることが三つあった。



- ①それぞれのグループの成果をグループ内で共有する機会はあるが、全教員が日々の実践に活用するまでには至っていない。
- ②担当教員の入れ替わりが激しく、研究に関すること以外についても、日々の実践や担任業務についての情報共有の機会を求めている教員が多い。
- ③研究をけん引していく人材が固定化し、早急に若手の人材育成が必要となっている。

そこで、この三つの課題の解決を図るため、若手育成を目指した主体的な教員の情報共有の場を、「みんなで支える支え合う特コ・特担・通級担当の社交場」として計画した。

II 活動内容と成果

1年目の令和6年度は、8月に特別支援教育に関わる教員が、協働的な前向きで主体的に活動したくなるきっかけになればと全国大会福井大会でも講演をしていただく書家でプレゼンテーションクリエイターでもある前田鎌利氏に、「念いは伝わる」のテーマのもと講演をお願いした。

(参加者の感想)

- ・とても楽しくためになる講演でした。家に帰ってから家族に報告したくなるくらい、興奮しました。素晴らしい機会をいただき、本当にありがとうございました。
 - ・前田先生の講演は毎回新たな気づきがあり、楽しく学ばせていただいております。今回は、中学生向けの講演と違った視点のお話もあり、大変興味深い内容でした。毎日6～15分の雑談、信頼インフラの構築など、今後の生活の中で意識していきます。今回も貴重なご講演をありがとうございました。
 - ・人に積極的に関わっていくことへの苦手さを感じている自分としては、仕事だけでなく地域や他の人との繋がり方で、気負いなくやってみようかと思えることがあり、その思いの整頓のためにも、十一月の講演ももっと聞きたいと思います。
 - ・伝えるから伝わる、これからのコミュニケーションについて大切なことを学びました。
 - ・オンライン画面越しではご講演をお聞きしたことはありましたが、今回、大変近くで直接お話をお聞きできて、大変嬉しく思いました。あっという間の時間でした。
- 「念いを伝える。」ことができているか、「念いが伝わっているか。」自分を振り返るきっかけをいただきました。



参加者の感想にもあるよう、前田謙利氏の講演から先生方に何事に挑戦しようとするエネルギーをいただくことができた。この講演会のあと、講演会やワークショップを開催する際に実行委員会を開く場合、お手伝いいただけるという先生の申し出が7名もあった。



また、この日は、生活単元学習部会、特別支援コーディネーター、通級による指導のグループの研究発表のプレゼンをお互いに見て、意見交換する機会も設けた。前田謙利氏の講演にも刺激を受け、研究会では活発な意見が交わされることになった。

秋には、鯖江市の特別支援学級保護者会「鯖江市育友会」の地域交流行事であるじゃがバター屋さん出店の参加協力を保護者交流の研修として位置づけることで若手教員の保護者と連携する力の育成をめざした活動を行った。なぜ鯖江市育友会でじゃがバター屋さんを出店することになったかという経緯を説明する。歴史は、20年以上前にさかのぼる。鯖江市の吉川小学校のある吉川地区では、毎年、秋に吉川ふれあいまつりという地域で行う大きなイベントが開催されている。当時、本連盟の令和六年度の功労者表彰を受賞した内田吉則先生が、吉川小学校の特別支援学級の担任として在職中に、児童と一緒に畑で育てたじゃがいもを使って、規模は小さい店ではあるが、じゃがバター屋さんを出店した。管理職をはじめとする周りの人たちに応援されながら、児童たちがお客さんに感謝され、実した体験をしたということが続けていくきっかけとなった。3年ほど、吉川小学校としてこの活動を続け、内田先生が他校に異動される際、活動を鯖江市育友会が引き継ぎ、毎年、市内の学校の児童生徒、保護者、先生と活動を続けていき、今に至っている。



長年、鯖江市で特別支援学級の担任をしている教員は、じゃがバター屋さんなどの行事を通じて、保護者や児童生徒とつながり、普段の学校での教育活動でも円満な雰囲気でも教育活動を進めることができている、「苦情ゼロ」である。行事は、休日に開催される場合が多いので、若手の先生方にとっては、業務改善の観点からは、負担になるかもしれないという懸念があるのは確かである。しかし、保護者、児童、教員が円満な関係を作ることが、一番の業務改善につながると考え、若手教員には、このような「苦情ゼロ」のメリットを伝え、希望があれば参加していただいている。

今回は、社交場事業として吉川ふれあいまつりの前に生活単元学習の研修として、内田先生直伝のじゃがバターづくりの研修を行い、約15名が参加した。今年から通常学級から特別支援学級に変わってこられたばかりの先生も参加されていた。じゃがいもの洗い方、芽の取り方、蒸し加減の確認の方法など、様々なコツを教えていただいた。参加者からはこんなに簡単な手順でおいしいじゃがバターができるということに感動し、ぜひ学校の活動でも取り入れたいという声を多くいただいた。

この中の一人の通常学級から特別支援学級に変わったばかりの先生は、早速、授業で生活単元学習として、児童たちと一緒にじゃがバターを作ってみようとした。児童の評判もよくこの学校は、11月の全国大会福井大会の学校見学会の会場にもなっていたが、児童との相談の中で、じゃがバターやさんの活動が、お客様を招待するおもてなしの活動の一つに採用されることとなった。本番の学校見学会においても、児童たちが、様々な企画で全国の先生方をもてなし、じゃがバターでも喜んでいただき、貴重な経験を得ることができた。担任の先生が、これからも社交場や鯖江市育友会で学んでいくことを生かし、児童にとって充実した学級づくりにつながっていくことを強く願うばかりである。

もう一つの社交場のねらいとしては、当初は、全国大会に向けて取り組んできた「生活単元学習」、「特別支援コーディネーター」のテーマを軸に各研究グループの成果の交流と活用を目指して取り組むことがあった。しかし、実際は、各グループとも十一月の全国大会福井大会の発表に向けて更なる研究を続けることになり、研究成果の共有をする機会ももてたものの、お互いの成果をすべてのメンバーが活用するということまでには至らなかった。今後、二つのグループで培った財産をお互いに活用できるよう働きかけていく。



なお、二回目の講演会を予定していたが、実行委員で話し合い、その予算で授業や学級づくりに役立つ書籍、教材などを購入して、社交場文庫として活用することとなった。

III 取り組みを終えて

次年度は、鯖丹地区特別支援研究部としてではなく、若手教員がより参加しやすいような小回りの利く自主団体を作り、新しい社交場事業として活動し、そこから、新しい先生をはじめとして仲間をどんどん増やしていくことで地域のリーダーの育成及びボトムアップに貢献していきたいと考えている。